

印欧語根と日本語語彙の比較研究

Comparative Studies between Indo-European Roots and Japanese Words

新谷光二
Koji Atarashiya

ABSTRACT

Etymological and comparative studies were carried out on Japanese words and proto Indo-European Roots. Comparisons were also made between Japanese words and those of Indo-European languages, including Germanic, Greek and Latin. Links between some cognate words between Japanese and English were clearly shown, especially, English STEEL and Japanese TETU(鉄) and other words. English CERAMIC and Japanese KA(罫) and other words. English STAY³ and Japanese TAGA(籬), English CORNER and Japanese KANE(短), Greek KORE or English CORA (woman's name) and Japanese MANA-KO(眼) etc. Rules of sound correspondence in Indo-European Roots and Japanese words, were obtained, i.e. the correspondence of /st/ to /t/, /t/ to /t/, /k/ to /k/, and /r,l/ to /r/ in the middle of words etc. Vowel sound correspondence is very difficult and complicated, and will be a future problem for comparative studies.

Key Words: etymology, comparative study, Indo-European roots, Japanese words,
rules of sound correspondence

I はじめに

日本語の言語系統については諸説があるが、学界で統一された定説は存在しない。著者はこの問題に関する過去20数年間に及ぶ研究成果を取り纏めて、出版した。¹⁾ その要点は日本語の言語系統は印欧語族に属するという主張である。その科学的論拠は印欧語根(以下IEと書く)と日本語語彙(以下Jpnと書く)との間に音韻対応法則が成立することである。それは、/l/ (IE、/ /は音素記号) 対 /k/ (Jpn)²⁾ に見られるような一見不思議な対応関係である。このような音韻対応は決して偶然に生じたものとは認め難く、日本語印欧語族論の決め手となった。しかも、音声学的にも言語一般通則からも十分

説明できるものであることが信憑性を高めている。即ち、/l/と/g/とは調音点が近く、両者は紛れ易いことが上げられる。古代日本語にはその語彙に濁音で始まるものは無く、/g/で始まる語彙は必然的に語頭音は/k/に変化したと考えられる。さらに、「楽」は「らく」であると同時に「がく」であることを指摘できる。³⁾ さらに、*stで始まるIE(*印は語根が指定されているが記録に無いことを示す)はJpnとの対比においては必ず語頭の/s/を落とす法則性が見出されている。⁴⁾ おなじ法則性は*skで始まるIEについても成り立つ。⁵⁾ このような音韻環境の/s/は極めて不安定であることは幾つかの印欧語族語派で明らかにされている。⁶⁾

本論文では対応の新例を示し、日本語が印欧語族に属するとする所論をさらに明らかにしたい。なお、言語系統の解明には類型論や統語論、諸文法事項の一致、合わせて歴史的、地理的必然性が重要だとする説があるが、やはり決め手は語彙間の音韻対応にあることを主張したい。

II 比較の方法

本来ならば同一語派に属する複数の言語が存在して、それらを比較することによって、より古い語彙や語根を措定することが比較言語学の比較の方法である。しかしながら、現在使用されている言語で、日本語と同派に属することが証明された言語は存在しない。したがって、本論文の比較法はIEとJpnとの直接比較である。この場合、日本語の内的再構などにより、できるだけ古い語形、語根が明らかにされる場合は、それとIEとの比較が良いのは当然である。同時に、1語対1語の比較では任意性が入る余地が高いので、同一単語家族 (word family) 内の語彙、同一音形の語彙などを一括して比較することを試みる。当然ながら語彙は音韻も意味も変わり得るとの前提に立っている。変化が認められつつも同根と考えられる語彙があることが証明力となる。

英語語彙 (以下Eと書く) steel (鋼) と ceramic (窯業製品) との単語家族及び同一音形の語根を有する語彙とJpnとの比較を行い、その結果を明らかにする。これらの語彙を選ぶ理由は著者の専門分野「物質工学」に関係するものであり、且つ現在工業的に用いられている中心的材料であるからである。これらの語彙、同源語などを知ることは言語学のみならず、自然科学の視点からも興味をひくからである。

II-1 steelの語源

steel は古期英語語彙 (以下OEと書く) steli であり、オランダ語語彙staal、ドイツ語語彙

Stahlとともに西ゲルマン語語彙 *stakljam から生じている。*stak- は「堅くする、固める」という意味であったので、steelは「しっかり立つ」ということが語源である。また *stak- はIEの *stā- に遡及することが分かっている。IEの意味は「立つ」であり、派生語彙は「立っている場所や物」になっている。

II-2 ceramicの語源

この語彙はギリシア語語彙 (以下Gkと書く) のkeramosである。意味は「陶土、陶器」である。IEは *kera-mo- という派生形が措定されており、標準階梯 (standard grade) は *ker-⁴ である。4は同一形のIEが少なくとも4個あることを示している。各々は同音異義語であり、*ker-⁴の意味は「熱、火」である。

II-3 語彙の派生と発達

一般に語彙の派生は語幹母音の変化によって生じている。IEでは標準階梯での語幹母音は /e/ であるので、e-階梯とも呼ぶ。しかし、母音 /e/ 以外を語幹母音とするIEも勿論存在する。一方、Jpnの語幹母音は /a/ の場合が標準階梯と考えられている。即ち、IEの /e/ は Jpn の /a/ に対応するのが原則である。語根は一般に母音交替以外にも語尾が付き、変化し、または接頭語が付いたり、時には省略、脱落が起って語彙が増していく。当然 *stā- も *ker-⁴ も同様にして、語彙を派生させている。それらの派生形もしくは他の同音異義語とJpnの音韻、語意を比較して対応関係を明らかにする。記号 > は発達形式を次に書くことを示している。steelと単語家族の語彙に次のものがある。

*stā-(IE) > *stak- (拡張型) > *stak-o- > *staga (Gmc) > stæg (OEマストを支えるロープ) > stay³ (Eコルセット)

また、*stā-の派生語彙に以下のものがある。

*stā-(IE) > *stǣ-(ゼロ階梯) > *stǣ-nd-(語尾添加) > standan(Gmc) > standan(OE立つ) > stand(E立つ)

*stāw-(拡張形) > *stow-(Gmc) > stow(OE場所) > stow(E場所)

ゼロ階梯は母音交替の一種であり、母音が弱化して曖昧母音となっている。Gmcはゲルマン語をOEは古期英語を示す。さらに、

*stǣ-tyo-(語尾添加) > *stathjon(ON) > stedhi(ON鉄敷) > stithy(鉄敷)

*stǣ-tu-(語尾添加) > status(L位置、状態) > state(状態、様子)、station(駅、場所)

などがある。ONは古期スカンジナビア語語彙を、Lはラテン語語彙を示す。

又*ker⁻⁴と同形式のIEとその派生語彙は以下の通りである。

*ker⁻¹(角、頭、有角動物、角状のもの、突起物) > *k_ṛ-(ゼロ階梯) > *kk_ṛ-n(語尾添加) > *hurunaz(Gmc) > horn(OE) > horn(E角)

*kr-n(語尾添加) > *cornu(L角) > corn(Eうおめ、まめ)、corner(E角)

*ker-wo-(語尾添加) > cervus(L鹿)

*ker⁻²(騒音、鳥の名) > *k_ṛ-(ゼロ階梯) > *hring-(Gmc) > *hringan(OE鳴り響く) > ring(E鐘を鳴らす)

*k_ṛ-(ゼロ階梯) > *hrokaz(Gmcカラス) >

hroc(OEカラス) > rook(Eカラス)

*kor-(O-階梯) > korax(Gkカラス)

*ker⁻³(成長する) > *kre-(拡張形) > *kre-sko(語尾添加) > crescere(L成長、増大) > crescendo(Eクレッシェンド、次第に強く)

*kor-wo-(語尾添加) > kouros, koros(Gk少年)

*kor-wa-(語尾添加) > kore(Gk少女、瞳、瞳孔) > Cora(E女性人名)

/ɹ/は母音化した/r/を示す。/k/ (IE)は/h/ (Gmc)と対応する。以上にはJpnと対応させることができる語彙のみをあげた。勿論、両語根とも更に多数の語彙を派生させている。

Ⅲ 比較の結果

対応する語彙をその意味とともに以下に示す。まず*stā-の派生語彙からsteel(E鋼)とtetu(Jpn鉄)及びtatara(Jpn踏鞴、炉)、stay³(Eコルセット)とtaga(Jpn籬)、stand(E立つ)とtatu(Jpn立つ)、stow(E場所)とto(Jpn場所)、stithy(E鉄敷)とtuti(Jpn鋤)、state(E様子)とtati(Jpn質)、station(E駅)とtati, tate(Jpn館)であるが、これらはいずれも単語家族である。次にker⁻¹⁻⁴の派生語彙からceramic(E)とkarami(Jpn鍛)、kera(Jpn鍛)、ka(Jpn甕)、ke(Jpn筍)は単語家族、horn(E角)及びcervus(L鹿)とka(Jpn鹿)、corner(E角)とkane(Jpn矩)はまた単語家族、ring(E鐘)とkane(Jpn鐘)、rook(Eカラス)とkara-su(Jpnカラス)、korax(Gkカラス)とkoroku(Jpnカラスの鳴き声)も単語家族、crescendo(Eクレッシェンド)とkari(Jpnかり、上がり調)、koros(Gk少年)とko(Jpn児)、kore(Gk瞳孔)とma-na-ko(Jpn眼)も単語家族として存在する。IEの/k/はGmcでは/h/として、Lでは/c/として、GkやJpnでは

/k/として発達した。以上の対応について、個々の場合を続いて論じる。

Ⅲ-1 *stā-の派生語彙

*stā-のtetu(鉄)への発達は *stā->*stək->*teku>tetuと考えられる。

最後のプロセスを言語学では音韻同化という。当然、/k/と/t/とは紛れ易い音韻である。Jpnのtetu(鉄)は正倉院文書にでてくる意外に古い語彙である。鋼は炭素含有量が低い鉄であるから両者の関係は十全である。語源は「しっかり立つ」ということからの命名である。なお、

tatara(踏鞴)へは、*stā->*stək->*stakl->*takula>tataraと考えられる。

前述の音韻同化である。/l/の入ることはGmcで*stakljamとなっていることと平行しており、確からしい。Steel(鋼)の語尾でもある。なお、IEの語中、語尾の/l/はJpnの/r/に対応する。tatara(踏鞴)は和鋼生産には不可欠の送風機であり、炉全体の意味でもあるのでsteel(鋼)と関連がある。「たたら製鉄法」として知られる。

*stā-のtaga(籬)への発達は *stā->*stək->*stək-o->tagaと考えられる。

Gmcへの発達が前述の如く/s/を除けば全く平行的にstagaとなっているのでこの変化は確度が高い。語意の点ではstay³がコルセットを形作るための細い平らな金属のことをもいうのでtaga(籬)の語意と良く一致する。語源は「支持する、固定する」から生じた。

*stā-のtatu(立つ)への発達は *stā->*stə-nd->tatuと考えられる。

これは非鼻音化で説明される。この語意はstand(立つ)と全く同意である。

*stā-のto(場所)への発達は *stā->stāw->toと考えられる。

このIEの基本的意味は「立つ、場所」であるので、Jpnへはその両方の意味が受け継がれており、対応の確かさが証明される。

*stā-のtuti(鋸)への発達は *stā->*stə-tyo->tutiと考えられる。

tuti(鋸)とstithy(鉄敷)との関係は刀鍛冶などにおける金槌と鉄敷別名アンビルとのそれである。語源の場合、一組の用具などでこの様に入れ違いの現象はよくあることである。このような場合はむしろ信憑性が高い。

*stā-のtati(質)、tati(館)、tate(館)への発達は *stā->*sta-tu->tati, tati, tateと考えられる。

Lのstatus(位置、状態)とEのstate(状態、様子)、station(駅、場所)との意味の符合は十全である。

以上の単語家族の語源はそれぞれIEの意味「立つ、立つ場所、立つ物」から派生している。これらの変化で共通する特徴的なことはJpnにおける語頭音/s/の脱落である。言語現象としては音韻環境が同一であれば必ずそうなるといえる。平易に表現すればIEの語頭音/s/を取るとそこにJpnが現れる。この様に一定普遍の音韻の規則を音韻対応法則と呼ぶ。

Ⅲ-2 *ker-¹⁻⁴の派生語彙

*ker-⁴のka(甕)、ke(筒)への発達は *ker-⁴>ka及びker-⁴>*kr>keと考えられる。

このゼロ階梯からはEの場合carbon（炭素）を派生させている。ka(甕)、ke(筈)は「かめ」と「食器」であり、陶器が主流であるから、IEの原義にはもとらない。同様

*ker⁻⁴のkera(鋳)への発達は*ker⁻⁴>k r->keraと考えられる。

*kera(鋳)というのは前述の「たたら製鉄法」における和鋼のことである。IEの原義「熱、火」から十分領ける。

*ker⁻⁴のkarami(鋳)への発達は*ker⁻⁴>ker-mo->karamiと考えられる。

karami(鋳)は鉍石を精錬する時発生する非金属融体のことで、まさしくセラミックスである。

以上はceramicの単語家族の対応である。語源は「熱、火」である。

*ker⁻¹のka(鹿)への発達は*ker⁻¹>*kr_g>kaと考えられる。

IEの意味は前述のとおりで、「有角動物」の代表である鹿の登場は当然すぎる。ka(鹿)はsika(鹿)の古形である。とするとsiは何か、今のところ未解決である。

*ker⁻¹のkane(矩)への発達は*ker⁻¹>*kr_g-n->kaneと考えられる。

*kane(矩)は矩形などで分かるように直角のことである。曲尺(かねじゃく)を思いだせば、そのことは領ける。語源は「角」であった。ka(鹿)とkane(矩)は単語家族である。

*ker⁻²のkane(鐘)への発達は*ker⁻²>

*kr_g-n->kaneと考えられる。

Eのring(鐘を鳴らす)はGmcを経ているので/k/が/h/に変わり、その/h/を落とした形になっているため似て非なるものになっているがkane(鐘)と単語家族である。カラスを巡る語彙については既報⁷⁾であるので、ここでは触れない。

*ker⁻³のko(児)への発達は*ker⁻³>*kor->koと考えられる。

Gkが少年少女になっているのでJpnは男女に共通のko(児)になっている。語源はIEの「成長する」の意からである。

*ker⁻³のmana-ko(眼)のkoへの発達は*ker⁻³>*kor->koと考えられる。

この場合mana-ko(眼)が合成語であることは疑う余地はない。「目のこ」と解釈されている。この語意は「瞳、黒目」から転じて「目」となった。⁸⁾ 従って、koの意味は「瞳、瞳孔」である。これはIEの語意「成長する」から生じている。古代人も瞳孔が広がり次第に大きくなるのを観察していたわけである。単語家族をなす和楽のkari(かり、意味はあがり調子)と洋楽のcrescendo(クレッシェンド)との一致を含めこれらの対応の確かさが分かる。

IV 考察

この論文における語彙の対応はIEとJpnとの間で見出されている。しかし、一方でJpnとEとの対応もその意味においては殆ど変わらない語彙についてなされている。それらのEはGmcから正統的に引き継がれたものが多いが、EとIEとの比較では、特に音韻について、かなり大幅に変化したものが多い。それがJpnとIEと

の比較では、その意味も音韻も、/s/のような一部の規則的音素脱落などを除けば、さしたる変化がなく引き継がれているものが多い。このことは日本語が原印欧祖語の古い基層を受け継いでいて、しかもその後の変化が少なかったといえる。英語はむしろ変化して来た言語であるといえる。

言語の語彙は一般に、単純から複雑へ、また複雑から単純へと変化を繰り返して来たといわれる。Jpnの場合はIEを単純に受け入れて来たといえそうである。この論文における比較で見た如く/cvc/の語根(cは子音、vは母音)を/cv/の音形の一拍的語彙にしている場合が多い。日本語に一拍語が多く、従って、同音異義語が多い理由になっていると考えられる。

この論文に現れたIE>Jpnの音韻対応は、/st/ > /t/, /t/ > /t/, /k/ > /k/, /k/ > /g/, /k/ > /t/, /d/ > /t/, 語中の/r/ > /r/, /m/ > /m/, /n/ > /n/, /y/ > /i/, 母音については、/e/ > /a/, /a/ > /a/, /o/, /ə/ > /a/, /e/, /u/, /r/ > /a/, /e/, /o/ > /o/, /aw/ > /o/ (ゴシックでJpn音素を示す)の如く整理できる。子音については、ほぼ整理できているが、母音については未整理の部分が多い。この点は今後の課題といえる。

この論文に現れた特殊な限定された語彙の対応はなぜかLやGkに関連したものが多い。kane(矩)はLとの対比であったし、mana-ko(眼)はGkとの対比であった。これらの明確な語源の解明はIEとの比較無しにはできるとは思われないうし、語源学の体系化がいかに重要であるかを物語っている。日本語は英語即ちゲルマン語と関わりを持つ一方でギリシャ語やラテン語とも関連性があることからすれば、原印欧祖語の中の日本語は独自の語派を型造ると考えられる。

V むすび

基幹材料である鉄鋼とセラミックスの関連語彙を中心に比較法を説明し、語根の措定方法、語源の解明方法を論じ、興味深い結果を得た。日本語語彙の語源は印欧語族の枠組みの中でこそ解明でき、語源学の体系化がなされることがいよいよ明確にされた。これは比較言語学の揺るぎ無い成果の一端であるといえる。

文献

- 1) 新谷光二(1996)「唇の謎恋の懸け橋—日本語印欧語族論—」共同文化社(札幌)
- 2) 新谷光二(1996)「唇の謎恋の懸け橋—日本語印欧語族論—」p25 共同文化社(札幌)
- 3) 新谷光二(1996)「唇の謎恋の懸け橋—日本語印欧語族論—」p13 共同文化社(札幌)
- 4) 新谷光二(1996)「唇の謎恋の懸け橋—日本語印欧語族論—」p73 共同文化社(札幌)
- 5) 新谷光二(1996)「唇の謎恋の懸け橋—日本語印欧語族論—」p121 共同文化社(札幌)
- 6) Watkins, C. (1975) : The Heritage illustrated Dictionary of the English Language p1496 McGRAW- HILL / MARUZEN (Tokyo)
- 7) 新谷光二(1996)「唇の謎恋の懸け橋—日本語印欧語族論—」p93 共同文化社(札幌)
- 8) 日本国語大辞典(1975)小学館(東京)